慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アベラール『Dialogus』の成立年代について(一)
Sub Title	On the chronological problem of Peter Abelard's Dialogus (I)
Author	三上, 朝造(Mikami, Tomozo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.489- 503
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	西洋史 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0493

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アベラール『Dialogus』の成立年代について（一）

三上朝造

序

豊穣の十二世紀を代表する思想家アベラール（一〇七九～一一四二）の神学、論理学、倫理学の著作は、近年厳密な写本研究に基づく校訂版が相次いで刊行され、多面的な研究が進められているが、本稿で考究を試みる『哲学者、ユダヤ人、キリスト教徒の対話（Dialogus inter Philosophum, Iudaeum et Christianum）』（以下『Dialogus』と略記）は一九六六年R・トマスがはじめて本格的研究書を公けにし、[1] 次いで一九七〇年彼自身の手により従来のミーニュ版、クーザン版に代わる批判校訂版が上梓されたのを機に、[2] 一時途絶えていた研究の気運が昂まりつつある。[3]『Dialogus』はアベラールの作品としては異例とも言うべく、本書のみが対話形式をとり、架空の人物を配した夢物語の設定である上、未完の作であるという点で、特異な性格を帯びている。従来研究の焦点に据えられていたのは、本書の主題たる最高善をめぐるアベラールの倫理思想はさて措き、㈠成立年代、㈡登場人物、とりわけ議論の主導権を握り、異彩を放つ「哲学者」の思想傾向、出自、モデルに係わる問題であった。㈡については、既にJ・ジョリヴェが斬新な説を唱え、[4] これを支持する研究者が多い。㈠の成立年代に関しては、一九三〇年代以降視点の相違はあれ、最晩年期すなわちサンス教会会議（一一四〇年七月）後のいわゆるクリュニー時代の作品ということで意見の一致をみていた。ところが近年この最晩年説に異議を唱え、成立年代をサンス教会会議以前に求める説が提出されたため、この問題についての再検討が迫られている。かかる事

情を考慮し、旧来の所説を比較検討した上、新たな見地から管見を披瀝してみたい。

一

予め、『Dialogus』のテキスト、登場人物、構成、内容等主題の考究にあたり、念頭におかねばならない事柄についてふれておこう。まず、『Dialogus inter Philosophum, Iudaeum et Christianum』という表題は、一八三一年 Fr.・ラインヴァルドがはじめて本書を公刊した際、彼自身の命名になるもので、ミーニュ版、クーザン版、トマス版何れもこの表題を継承しているが、アベラール自身本書をどう呼んでいたかは詳らかでない。現存の六種の写本の中最古のものは『Dialogus Petri Baiolardi』、他は『Petri Abaelardi Collationes』と記されているが、[5] この表題に係わる問題は新たな説が提起される契機となった。次に、登場人物は「哲学者」「ユダヤ人」「キリスト教徒」の他に、夢の中で彼らに出遭い、しかも請われて三者の討論の裁定者（Judex）となるアベラール自身の計四人である。「哲学者」は異教徒（gentilis）であり、その宗教的立場は、自然法のみで事足れりとし、聖典を不要の掟と考えているが、これにも充分通じている。「ユダヤ人」「キリスト教徒」は各々聖典に拠り、裁定者たるアベラールは「哲学者」同様、自然法、聖典いずれにも習熟した人物として描かれている。[6] さらに、本書の構成は序、第一部「哲学者」と「ユダヤ人」の討論、第二部「哲学者」と「キリスト教徒」の討論の三部から成り、三者相まみえて議論を交す形式をとっていない。また本書の主題は、最高善（summum bonum）の定義とそれに到達する方途について論じた第二部にあるが、後述するように、成立年代を探るにあたってはむしろ第一部の方が示唆するところ大であるように思われる。また既述のごとく本書は未完であるが、この未完の作であるということが成立年代といかなる係わりをもつか一考を要する。最後に、アベラールの経歴、人となりを知る上で不可欠の史料である彼の『厄難の記』は、本稿の主題追究の上で特に重要な指針を与えてくれるものであることを付記しておきたい。

一般にアベラールの著作の年代決定は、彼自身の手になる加筆、改訂が多いこと、現存の写本がきわめて乏しいこと等の理由で容易ではなく、相対的年代推定で満足せねばならないと言われている。[7] それゆえ、年代決定の客観的証しが得られない場合、当核作品の綿密な分析は言うに及ばず、他の作品との関連、作品より窺い知れる著者の心理をもとに検討せねばならない。このことは、『Dialogus』の年代決定についてもあてはまる。既述のごとく、『Dialogus』の成立年代については二つの説がある。第一のいわゆる最晩年説は、アベラールが一一四〇年七月のサンス教会会議でその論が謬説と判定され異端宣告を受けた後、ローマ教皇庁へ提訴の途上クリュニー修道院に身を寄せ、サン・マルセル修道院で死を迎えるまでの時期、すなわち一一四〇年九月頃から一一四二年四月[8]の間に書かれた遺作と想定するもので、サイクス、トマスらが代表的な論者であり、[9] これがいわば定説であった。いま一つは、新たな観点から最晩年説を否定し、サンス教会会議以前の作と断じ、成立年代を一一三〇年代半ばと推定する説で、これは近年E・ビテールがはじめて主張し、筆者の知る限りラントグラーフ、ラスコム、ベントンがこの説に倣っているようにみえる。[10]

先ず、最晩年説から始めよう。サイクス、トマスらが『Dialogus』の成立年代をサンス教会会議以降とみなす論拠は種々あるが、その中彼らが決定的と考える根拠は、『Dialogus』序の一節の解釈に基づいている。当処で「哲学者」は討論の裁定を請うべく、アベラールの豊かな学殖を讃え、彼にこう語りかけている。「certum se nobis prebuit experimentum *opus illud mirabile theologie*, quod nec invidia ferre potuit nec auferre prevaluit, sed gloriosius persequendo effecit」[11]（かの驚歎すべき神学の書が確たる証拠として、私共の前に示されました。それを嫉妬が耐え忍ぶことも奪い去ることもできず、却って執拗につきまとうことで一層光り輝くものにしたのです。）彼らはこの箇所にみえる opus illud mirabile theologie を、アベラールの主著の一つである『Theologia Scholarium』に相違ないと考えている。[12] なぜなら、本書こそサンス教会会議で断罪書目の筆頭に挙げられた書だからである。本書は一一三五年頃執筆されたが、一一三七年頃よりゴティエ・ド・モルターニュ、クレールヴォーのベルナールら論敵の間で謬説の箇所ありと判定され、彼らとアベ

ラールはこの問題をめぐって論戦を交わしたものの、その審理はサンス教会会議の場に持込まれ、上記の結果となった。周知のごとく、その後アベラールはクリュニー修道院に寄寓し、そこでペトルス・ヴェネラビリスの手厚い庇護の下、ベルナールと和解し死に至るまで著述に専念することになる。かかる事情を考慮に入れ彼らは、「嫉妬が耐え忍ぶことも奪い去ることもできず、却って執拗につきまとうことで一層光り輝くものにした」opus……theologie とは、サンス教会会議前後の論敵の迫害にも拘わらず生き永らえた作品すなわち『Theologia Scholarium』について述べたものであるとみなし、『Dialogus』は本書執筆後クリュニー修道院時代に成ったと結論づけている。

特にサイクスは、右に掲げた「哲学者」の讃辞とともにその直ぐ前に記された同じく彼のアベラールに対する讃辞、すなわちアベラールが鋭敏な知性の持主であり、哲学、神学についての造詣も深く、学院に於て、双方の学にかけてはなべての教師、著述家を凌駕する力量を具えていたという箇所[13]に注目し、次のように論じている。かかる「哲学者」の讃辞は、アベラールにとって最大の試練の時代であったいわゆるトロワ近傍のパラクレトゥスおよびブルターニュのサン・ジルダ・ド・リュイス時代（ca. 1123～1135）の彼に向かって発せられることは考えられず、彼が一一三六年パリに帰還し、再び声名を馳せた数年後すなわちクリュニー時代でなければありえないことである。またこの讃辞は、アベラールを慰めようとしている節がみられるゆえ、それは彼の名声が潰えかかっていた時期、すなわちサンス教会会議に於る断罪後に与えられてこそ相応しいものであると。[14] さらに続けてサイクスは『Dialogus』の作風を問題にし、論調が穏やかであり、他の作品にはしばしば認められる論敵に対する攻撃的姿勢が窺われないことは、アベラールが異端宣告を甘受したことを裏書きするものであり、また本書が未完の作であり、内容が円熟の域に達していることは、最晩年の作であることを物語っていると述べている。[15] 同じくレミューサは、アベラールの信条は本書に余すところなく盛り込まれており、対話体という斬新な手法を用いていること、文調が寛ぎ、表現が生き生きしていること等は、アベラールが論争を主題とする想像上の作品という枠内で、思索の自由を享受しているためであると記し、成立年代にはふれていないが、明らかに最晩年説に傾

いている。[16] 加うるにトマスは最晩年説を固める根拠として、若し『Dialogus』がサンス教会会議以前に執筆されていたならば、ベルナールは、本書に登場する「哲学者」の宗教的立場を直ちにアベラール自身のものとみなし、必ずや本書をサンス教会会議の断罪書目に挙げていたであろうが、本書はその中に含まれていないことを挙げている。[17]

以上の最晩年説に対し、一九六八年ビテールははじめて否定的見解を示し、その論拠として二点挙げている。先ず件の opus illud mirabile theologie を『Theologia Scholarium』と断定しうるかどうか疑問だと言う。なぜならアベラールには Thelogia の名を冠する書は『Theologia summi boni』(一一一八～二〇頃)、『Theologia Christiana』(一一二三～二五頃)『Theologia Scholarium』(一一三五～三八頃)と三種あり、彼自身これらをともに Theologia の名で呼んでいた形跡があるゆえ、彼がもしこの三つの作品以外の書で Theologia を引き合いに出した場合、それが何れの Theologia であるかを確定するには充分な根拠を要するが、『Dialogus』中の opus……theologie は文脈からみて何れとも決め難いからである。[18] この微妙な問題については後に私見を述べてみたい。ビテールが『Dialogus』成立年代をサンス教会会議以前に据える決定的論拠は次の通りである。彼はアベラールの他の作品『ヘクサエメロン註解 (Expositio in Hexaemeron)』の一節に注目している。「Quid autem proprie bonum ac per se scilicet sine adjectione, vel quid malum sive indifferens dicatur, *in secunda collatione nostra* quantum arbitror satis est definitum」[19] (ところで、そもそも何がそれ自身で、すなわち何物もつけ加わることなしに善とよばれ、あるいは何が悪もしくは何れにも属さないものとよばれるのか、私の思うところは私達の第二のコラティオで十分定義されています。) ここで「私達の第二のコラティオで」(in secunda collatione nostra) というのは、ビテールによれば、この箇所で言われていることは事実『Dialogus』第二部 (R. Thomas, S. 159 l. 3126 seq.) で論じられているゆえ、collatio がいわゆる『Dialogus』を指していることは疑いないとされる。よって『Dialogus』は『ヘクサエメロン註解』以前の作とみなすべきで、後書は一一三八年頃に執筆されたと推定されるから、『Dialogus』はそれに先立つ一一三〇年代半ば頃に成立した筈であり、彼の遺作ではありえない。[20]

ビテールが『ヘクサエメロン註解』を一一三八年頃の作と考えるのは、本書はエロイーズの求めに応じて筆を執ったものであるが、アベラールが彼女のために書いた作品はすべてサンス教会会議以前に成っているからである。[21] ビテールの説は、従来どの研究者も顧みなかった処を指摘した点で一考に値するが、後述のごとく、トマスは幾つか疑問点を挙げている。

二

ここで私見を混じえつつ、両説を吟味してみよう。焦点に据えられるのは㈠サイクスら最晩年説を唱える論者が有力な手掛りと考える件の opus……theologie をどう解釈するか、㈡サイクスらが問題とする『Dialogus』の作風をどう考えるべきであるか、㈢件の collatio が『Dialogus』と同一書と断定しうるか否か、以上三点である。先ず opus……theologie を問題にしよう。通読すればわかるように『Dialogus』では先に引いた箇所以外に opus……theologie なるものについてふれている箇所はない。ビテールが言うように当核箇所のみで opus……theologie を『Theologia Scholarium』と考えることには難がある。なぜなら、opus……theologie はソワッソン教会会議(一一二一年)で異端宣告を受け、その上焚書の憂き目をみたアベラールの初期の労作『Theologia summi boni』を念頭においていたということも充分考えられるからである。それは以下の理由による。アベラールの手になる『厄難の記』には、彼が学生の求めに応じて書いた神の三位性と一体性を主題とする『Theologia summi boni』が好評を博したものの、ランのアンセルムスの弟子達に論難され、ソワッソン教会会議で断罪され、迫害をうける場面が記されている。[22] その後彼は残存した本書の写しをもとに、主題をさらに敷衍し一一二五年頃『Theologia Christiana』を執筆するが、例の『Theologia Scholarium』も本書をもとに書き上げられたものである。即ち『Theologia summi boni』は装いを新たに甦ることになる。このように本書は迫害を蒙りながらもなお生き残ったという事情を考慮するならば、「……それを嫉妬が耐え忍ぶことも奪い去ることもできず、

却って執拗につきまとうことで一層光り輝くものにしたのです」という言葉は、彼が『Dialogus』を執筆した際ソワッソン教会会議前後を顧み、「哲学者」の口を借りて語ったとも考えられる。とすれば『Dialogus』はサンス教会会議以前のある時期に書かれたと想定してもよいことになる。ただしこの場合『Dialogus』第二部で『Theologia Christiana』にふれている箇所[23]がみられるゆえ、一一二五年以降の作とせねばならない。

次にこの問題をめぐるサイクスの見解を調べてみよう。彼は「哲学者」のアベラールに対する讃辞は彼のパリに於る教授活動の再開（一一三六）よりも数年後でなければありえないと言うが、『厄難の記』をみる限りそうとは言い切れない。なぜなら、「哲学者」の言葉は、アベラールがシャンポーのギョームの許に弟子入りして以来ソワッソン教会会議に至る迄の彼の知的活動を簡潔に物語っており、この時期のアベラールは「哲学者」が讃える通り、哲学、神学双方に通じ、その才能は師をも凌いでいるからである。[24] また、名声が潰えかかっていた時期であったればこそ、「哲学者」の讃辞はふさわしいというサイクスの見方は、アベラールがサンス教会会議後においてのみその名声を失いかけたかのごとき印象を与えるが、アベラールはソワッソン教会会議の後、サン・ジルダ・ド・リュイス時代にも度重なる迫害による名声の喪失を歎じている。[25] つまり「哲学者」の讃辞は、サンス教会会議の後以外に考えられないというサイクスの論は説得力に乏しいと言わねばならない。当核箇所は、サンス教会会議後という特定の時期ではなく、すでに学の誉が高かったものの、迫害に苦しみ名声の喪失を懸念していたある時期に、アベラールが往年の盛名期に想いを馳せ、自らを慰める目的で敢えて「哲学者」に語らせたと考えるべきであろう。

さらに別な見方をして、当該箇所の文脈を無視し opus illud mirabile theologie のみを問題にするならば、この書の内容については何らふれていないゆえ、これを単に「かの驚歎すべき神学についての書」と解し、彼の画期的神学書たる『Sic et Non』（一一二五頃）とみることも可能であろう。要するに opus……theologie をめぐる問題については種々の解釈が可能であり、これのみで成立年代を確定することは妥当でない。

㈡の問題についてサイクスは、文調が穏やかで旧作のように論敵に対する攻撃的姿勢がみられないことをもって最晩年説の一つの根拠としているが、これにも同調し難い。なぜなら『Dialogus』文中には pugna, inquisitio, altercatio, conflictum[26] という語が幾度も用いられていることからみてもわかるように、本書は異なる宗教を代表する三者がアベラールを裁定者に戴き己れの信条を卒直に表明し、各宗教を比較対照した上で議論の優劣を競うといういわば論争で、単なる dialogus とは趣を異にするからである。しかも自然法にのみ依拠し、聖典の欠陥をあげつらう「哲学者」を登場させ、彼に「ユダヤ人」「キリスト教徒」を非難させている箇所[27]があることからも、本書は決して穏やかな論調で攻撃的姿勢に欠けているとは言えない。

またサイクスは本書が未完で終わっていることが最晩年の作であることを裏書きしていると言うが、アベラールには何か特別な意図があって、敢えて未完のまま筆をおいたということも充分考えられる。[28] またレミューサ、サイクスらが主張するように、『Dialogus』がはたしてアベラールの作品中最も円熟したものと言えるだろうか。それは単なる印象であり、実際に立証しうるかどうか危ぶまれる。当初より最晩年の作ということを想定して、そう述べたにすぎないのではないかと思われなくもない。

三

㈢の問題について、トマスは最近の論攷でビテールの説を批判している。それを要約すると以下の通りである。先ず、『Collationes Petri Abaelardi』とは一四〇〇年頃の写本に付された表題であるのに対し、一二〇〇年頃に成った最古の写本は『Dialogus Petri Baiolardi』となっている。また後者にはほぼ同時期に書かれたと思しき「Exoratio Magistri ad Discipulum: De Inquisitione summi boni」と題す小論の写本が添えられているが、そこで「dyalogum sub disceptatione Christiani et Judaei atque philosophi」(Migne, PL. 178, 1682 B) と記されていることより、アベラ

ール自身最古の写本にみえる表題を用いていたものと思われる。次に、アベラールの時代にあっては、collatio は多義的に用いられているゆえその語義確定は困難であるが、disputatio とは区別され、特に修道院ではしばしば観想を伴う講話の会という意味で用いられている。よって collatio という表題が『Dialogus』の内容に相応しい表題であるか疑問が残る。さらに『ヘクサエメロン註解』はエロイーズの求めに応じて書かれた作品であるゆえ、ビテールが指摘する本書の件の一節より察するに当然彼女が『Dialogus』第二部を読んでいたことを想わせるが、アベラールが未完のままで第二部を彼女に読ませたとは考えられない。また、「in secunda collatione nostra」は、アベラール自身列席したと思しき或る collatio（講話の会）で語ったことを想い起しかく記したともとれる。[29] 以上である。

ビテール説に対するトマスの反論は要を得ているかに思われるが、ここで試みに『Dialogus』にみえる collatio の用法を検討してみよう。筆者が調べた限りこの語は五箇所で使われ、文脈より察しアベラールがこれを表題に用いても不自然とは思われない。「哲学者」の言葉として記されているのは、㈠「et nostre *collationis altercatione* nondum finem adepta……」[30]（私達の「比較対照による議論」によっても未だに結論に達しませんので……）㈡「In qua quidem nostre *consultationis collatione*……」[31]（それについては、私達の「熟慮を重ねた意見の交換」によって……）㈢「Harum me, ut nosti, *collationum* tantummodo *desiderium* huc adduxit」[32]（御承知のように、かかる「討論にたいする熱意」のみが、私をここへ誘なったのです）以上三例である。「ユダヤ人」の言葉には、㈣「……ante proposite *collationis* nostre *conflictum*……」[33]（……これから始める私達の「互いに比較し合う議論」に先立ち……）㈤「Dominus ipse……nobis hanc conferat *collationem*」[34]（主御自身が……私達にかかる「会合」をお与えになっているのです）と二例ある。㈤を除き、四例は他の語と結びついて用いられているが、特に㈠と㈣は collatio が altercatio' conflictum という議論、論戦を意味する語の修飾語として使用され、比較対照が強調されている。『Dialogus』全篇を貫く姿勢は、異なる宗教間の教義を自由に論じ、その優劣を裁定者に委ねるというものである以上、アベラールが collatio を表題としたであろうことは充

分考えられるばかりか、本書の性格よりみて dialogus よりもむしろ collatio の方が内容を的確に表わしているようにさえ思える。[補註(1)] 以上の所論より、『Dialogus』の成立年代は何れとも定め難いが、筆者はビテールとは異なる理由でサンス教会会議以前の作と思われるゆえ、新たな視角からその論拠を述べてみよう。

四

第一に従来の説は、成立年代を推定するために『Dialogus』とアベラールの他の作品との関連を追究してきたが、『厄難の記』との関連については殆んどふれていなかった。この点に注目すべきである。なかんずく第一部「哲学者」と「ユダヤ人」の討論は示唆するところ大で、これを「厄難の記」と比較しつつ読むと重要な手掛りが得られるように思われる。さらに『Dialogus』は夢物語という形式をとっている点でアベラールの作品の中でも異色である。このことは直接成立年代と係わりがないと思われるが、『厄難の記』の記述と照らし合わせて考えると、微妙な係わり合いをもつと思われる。[35]

以上の点を論ずる前に、予め『厄難の記』について主題の追究のために銘記すべきことを述べておこう。先ず本書は一友人に宛てて発せられた書簡体の回想記であるが、この友人が誰であるか詳らかでない。執筆年代は、彼がブルターニュのサン・ジルダ・ド・リュイス修道院長の任にあった一一三二～一一三五年頃すなわち一一三六年パリで教授活動を再開する直前と推定されている。またこの書簡をしたためた時期の彼は、度重なる受難に思い煩い極度の絶望に陥っていたことが本書簡を通じて知られる。なお執筆の動機は、己が生涯を回顧しその行状、思想について弁明を試みることで自らの使命を再確認しその不遇を慰めるためであった[36]と同時に、教授活動という使命を果たすべくパリ帰還を思い立った彼が、本書簡をいわば宣伝文書として世に広めようとした[37]ことが考えられる。

先ず『Dialogus』第一部と『厄難の記』との密接な関連を想わせる箇所を挙げてみよう。『厄難の記』の結び近くでアベラールは「私はこれまでいわば年少の時より今に至る迄間断なく思い煩ってきた私の厄難の物語を綴ってきた」[38]と語

っているが、一一二五年頃より始まるサン・ジルダ修道院長時代の苦境については一きわ克明に記している。『Dialogus』の「ユダヤ人」の言葉には『厄難の記』に窺われるアベラールの心境を想い起こさせるものが少なからずみられる。「哲学者」に対し彼はこう語っている。「Quibus etiam adeo constrictis et oppressis, quasi in nos solos coniurasset mundus, hoc ipsum mirabile est, si vivere licet」[39]（その上、恰も世の人凡てが私達に対してのみ徒党を組んでいたかのように、苦しめられ虐げられている私達には、生きてゆくことはできるにしても、このこと自体異常なことなのです。）これとほぼ同じ心境は『厄難の記』では、サン・ドニ修道院に於て仲間の修道士と衝突し恨みをかった条で「utpote qui jam diu tam adversam habuissem fortunam, penitus desperatus, quasi adversum me universus conjurasset mundus」[40]（久しい間甚だしい不幸を経験してきた私は、恰も世の人凡てが私にたいし徒党を組んでいたかのように思い全く絶望した）と録されている。また先に引いた『Dialogus』中の「opus illud mirabile theologie……, sed gloriosius persequendo effecit」という言葉は『厄難の記』のランのアンセルムスの弟子時代を顧みた一節を想い起させる。「Que quanto manifestior tanto mihi honorabilior extitit et persequendo gloriosirem effecit」[41]（しかしこのことが明白になればなるだけ、私にたいする尊敬の念は増し、迫害はむしろ私に一層名誉をもたらしたのです）さらに『厄難の記』には、サン・ジルダ修道院の配下の修道士の悪辣きわまる振舞に管理することさえ思うに任せず身の危険すら感じ次のように語っている条りがある。「自分の生活が実に益なく不幸であることに思い悩み、以前は聖職志願の学生のために大いに役立った私ではあるが、彼らを捨てて修道士たちのために働く今は、双方にとって何の役にも立たないのであった。」[42] 周知のごとく、アベラールは当修道院を逃れ一一三六年パリのサント・ジュヌヴィエーヴの丘でソールズベリのヨハネスらに囲まれ研究生活に復帰するが、右の一節から、現在おかれた土地を逃れ、修道生活に終止符を打ち、使命と感じた教育、研究生活に復帰したいという願いを読みとることができよう。この願いを抱いてからパリ帰還までにどれほどの時間を要したかは杳として知れないが[43]、この点で『Dialogus』の「ユダヤ人」の言葉は示唆的である。「一体い

かなる敵のもとで、私達が流謫の生を送っているか、私達にいかなる庇護が期待できるというのか、ご覧にもなって下さい。不具戴天の敵に私達の命を委ね、不信仰者の信仰を容れることを余儀なくされています。弛緩した本性を殊のほか温め、甦らせる夢ですら、眠りつつも自らの生命の危険しか考えることができないほどの不安で私達を思い悩ませるのです。天に通ずる道以外に、どこにも私達は安全な道に歩み入ることができません。私達には居住地ですらなおのこと危険なのです。どこであれ最も近い所へ逃れ出ることすら少しも期待できません」[44]この記述は「私は呪われたカインさながら、あてどもなく逃れて、あちこちと流浪すべき身」[45]であり、「自分の頭上に迫っている剣を恐れて深淵に飛び込み、一つの死を暫し延ばそうとしてもう一方の死に逢う人の如く、私は一つの危険から他の危険へと意識しつつ赴いた」[46]と書かれている『厄難の記』の内容を要約しているようにみえる。なかんずくアベラールにとって最大の試練の時代であったサン・ジルダ時代の心境をそのまま述べたような気がする。年少にして学問修業のため諸国を巡り、パリに到達するや高名な師の説を論駁することで彼らの激しい敵意をかい「今日まで引続いている私の不幸はここに始まる」[47]とあるように、その後の彼は『厄難の記』を書き上げたサン・ジルダ修道院時代に至るまで数多の受難を経てきた。「ユダヤ人」の言葉の中でも注目すべきは「自らの生命の危険しか考えることができないほどの不安で……」という箇所である。『厄難の記』にもこれに酷似する記述が繰り返しあらわれている。たとえば、配下の修道士たちが「どれほど私の心を悩まし苦しめたか、また私をどれほど魂と身体の危険にさらせ……」[48]その上「毒を盛って私を亡きものにしようとした」[49]ため「恰も、いつも首のそばに剣が迫っている気がして……」[50]このような生命の危険を訴える彼は漸く当修道院を逃れるが、「どこであれ最も近い所へ逃れ出ることすら少しも期待できません」という「ユダヤ人」の歎きは一体何を意味するのか。サン・ジルダ修道院が位置していた処は、アベラールの記述によれば「これ以上逃れる先のない地の果て」[51]であったことを考えると、「ユダヤ人」の歎きは、現在の生活を断切り新たな生活へと乗り出そうとはするが「こうした危険に今なお苦しんでいる」[52]アベラールの心境を代弁しているかにみえる。トマスは『Dialogus』に登場する「ユダヤ人」は第一次十字軍と第

二次十字軍の間に生きた正統派ユダヤ教徒がモデルであると述べている[53]が、「ユダヤ人」の言葉は、アベラールが第三者の眼で彼に同胞の受難の歴史を語らせたというよりはむしろ、サン・ジルダ時代『厄難の記』を執筆していた折のアベラールの心情を彼に託して余すところなく吐露したものと考えられる。これより『Dialogus』の執筆年代は『厄難の記』をしたためていた時期とほぼ同期と推定しうるのではなかろうか。そして既述のように、『厄難の記』執筆の目的は自らを慰めるとともにパリ帰還を容易ならしむる宣伝文書を用意することであったが、『Dialogus』の執筆意図も「ユダヤ人」の言葉をみる限りそれと同じであったと思われる。

（未完）

註

(1) R. Thomas, Der philophisch-theologische Erkenntnisweg Peter Abaelards im Dialogus inter Philosophum, Judaeum et Christianum (Bonn, 1966) (以下 R. Thomas, Erkenntnisweg と略記)

(2) Petrus Abaelardus, Dialogus inter Philosophum, Iudaeum et Christianum, Textkritische Edition von Rudolf Thomas (Stuttgart, 1970) (以下 R. Thomas, Dialogus と略記)

(3) Peter Abelard's Ethics, An Edition with Introduction English Translation and Notes by D. E. Luscombe (Oxford, 1971, XXV～XXVII) を参照されたい。

(4) ジョリヴェは「哲学者」のモデルを、アベラールの同時代人でアラビアの哲学者 Ibn Badjdja (歿一一三八) と考えている。J. Jolivet, Abélard et le philosophe dans Revue de l'histoire des religions, CLXIV 1963 p. 181～189. idem, Abélard ou la philosophie dansl e langage (Paris, 1969, p. 91) Cf. R. Thomas, Erkenntnisweg, S. 178～179.

(5) 校訂版および写本の問題については R. Thomas, Dialogus, S. 16～35.

(6) ibid., S. 41～43.

(7) Petri Abaelardi Opera Theologica. I cura et studio E. M. Buytaert Corpus Christianorum Continuatio Mediaevalis XI (Turnholti, 1969, p. XXII seq.)

(8) アベラールの歿年は一一四二年四月二一日とされていたが、近年ビテールは一一四四年説を唱えている。Buytaert, op. cit,, p. XII

(9) J. Sikes, Peter Abailard (New York, 1965, first published in 1932, p. 267～268) : R. Thomas, Erkenntnisweg S. 27～29.

(10) E. Buytaert, Abelard's Expositio in Hexaëmeron Antonianum 43, Roma, 1968, p. 163～194, idem., Abelard's

Collationes, Antonianum, 44, 1969, p. 18～39, M. Landgraf, Introduction a l'histoire de la littérature théologique de la scholastique naissante (Paris, 1973, p. 83), D. Luscombe (ed.), Peter Abelard's Ethics p. xxvii., J. Benton and F. Ercoli, The Style of the "Historia Calamitatum",: A preliminary Test of the Authenticity of the Correspondence attributed to Abelard and Heloise, Viator, 6, 1975, p. 65.

(11) R. Thomas, Dialogus S. 43 ll. 50～53.

(12) J. Sikes, op. cit., p. 268, R. Thomas, Erkenntnisweg S. 27. Theologia Scholarium はパーリ版、クーザン版では Introductio ad theologiam の表題で収められている。

(13) R. Thomas, Dialogus S. 42 ll. 42～49.

(14) J. Sikes, ibid.

(15) ibid.

(16) Ch. de Remusa, Abélard, 2tom, (Paris, 1845 Nachdruck, Frankfurt/Main, 1975, vol. 2, p. 542～543.)

(17) R. Thomas, Erkenntnisweg, S. 157.

(18) Petri Abaelardi Opera Theologica. I. P. XXII, note 36.

(19) Petrus Abaelardus, Expositio in Hexaemeron, Migne, P. L. 178, 768B.

(20) E. Buytaert, Antonianum 43, p. 194. Antonianum 44, p. 39.

(21) Petri Abaelardi Opera Theologica, I. P. XXIV note 42.

(22) Abélard, Historia Calamitatum Texte critique avec une introduction par J. Monfrin (Paris, 1959, p. 82～89 ll. 690～909.

(23) R. Thomas, Dialogus S. 98 ll 1501～1503.

(24) Historia Calamitatum, Monfrin p. 64 seq.

(25) ibid., p. 102～103 ll. 1389～1400.

(26) R. Thomas, Dialogus, S. 42 l. 31 l. 38 S. 44 l. 90 S. 46 l. 55 S. 47 l. 163 S. 84 ll. 1163 S. 86 l. 1204 et passim.

(27) ibid., S. 42 l. 29 S. 90 ll. 1314～1317

(28) この点については次稿で論じたい。

(29) R. Thomas, Die Persönlichkeit Peter Abaelards im《Dialogus inter Philosophum, Indaeum et Christianum》und in den Epistulae des Petrus Venerabilis-Wiederspruch oder Übereinstimmung? in Pierre Abélard-Pierre le Vénérable, Les courants philosophiques, littéraires et artistiques en Occident au milieu du XIIe siècle (Paris, 1975, p. 256～260)

(30) R. Thomas, Dialogus. S. 42 l. 31.

(31) ibid., S. 42 ll. 1155～1156.

(32) ibid., S. 88 ll. 1260～1262.

(33) ibid., S. 46 ll. 154～155.

(34) ibid., S. 47 ll. 167～169.

(35) 夢物語という形式が成立年代といかに係わるか、この点については次稿でふれることにする。

(36) M. Mclaughlin, Abelard as autobiographer: The motives and meaning of his "Story of Calamities", Speculum 42, 1967, p. 463～488.

(37) J. Sikes, op. cit., p. 270. 最近『厄難の記』は偽作の疑いありとの新説が提出されたが、この点については後日問題にすることにし、ここでは真作として論を進める。

(38) Historia Calamitalum, Monfrin p. 107 ll. 1561～1563.

(39) R. Thomas, Dialogus, S. 51 ll. 284～286.

(40) Historia Calamitatum, Monfrin p. 91 ll. 983～985.

(41) ibid., p. 70 ll. 239～240.

(42) ibid., p. 99 ll. 1283～1289.

(43) 一時ランスに滞在していたという説もある。C. f. J. de Ghellinck, L'Essor de la littérature latine au XIIe siècle, 2e ed, (Braxelles, 1954, p. 44)

(44) R. Thomas, Dialogus, S. 51 ll. 272～281〔Ecce, inter quales nostra exulat peregrinatio, et de quorum nobis est patrocinio confidendum. Summis inimicis nostris vitam nostram committimus, et infidelium fidei nos credere cogimur. Somnus ipse, qui laxatam maxime fovet ac recreat naturam, tanta nos inquietat sollicitudine, ut dormientes etiam non nisi de iuguli nostri periculo liceat cogitare. Nusquam nisi ad celum tutus nobis patet ingressus, quibus ipse etiam habitationis locus est periculosus. Egressuri ad quelibet proxima loca ipsum, de quo parum confidimus.〕

(45) Historia Calamitatum, Monfrin p. 105 ll. 1490～1492.

(46) ibid., p. 98 ll. 1247～1250.

(47) ibid., p. 64 ll. 41～42.

(48) ibid., p. 99 ll. 1256～1259.

(49) ibid., p. 106 ll. 1501～1502.

(50) ibid., p. 107 ll. 1550～1551.

(51) ibid., p. 98 ll. 1250～1251.

(52) ibid., p. 107 ll. 1549～1550.

(53) R. Thomas, Erkenntnisweg, S. 140.

補註

(1) 十二世紀における collatio の用法、語義については、次稿で改めて論じてみたい。